

1. はじめに

この論文は、李孝石の日本語小説の中で「緑の塔」の占める位相を検討したのち、李孝石の作品世界を貫く1つのキーワードとしての美的感覚が、「緑の塔」で表象される様相を分析するという目的を持っている。1939年より発表された李孝石の日本語小説は、多様な方式で朝鮮の「伝統文化」を作り出し、その文化の美しさを賛美する過程を通じて日本とは区別される「朝鮮的な美」を構成するという特徴がある¹。そしてこの「朝鮮的な美」は、知識人主人公によってその価値が述べられ、単に朝鮮人が享有してきた慣習である以上の、独自の美的価値を持った保全すべき文化遺産の地位を獲得する。「緑の塔」もまた、「朝鮮的なもの」が持つ美を論じてはいるが、他の日本語小説とは違って英文学研究者が登場し、主人公の男女が互いを愛するようになる媒介として英文学が登場するという点で、「朝鮮的なもの」ではない外来的な要素、英文学を近代文学のモデルと見なす李孝石にとっては普遍的なものとしての「西欧的なもの」が小説の語りを牽引する重要な役割を果たしている。

地域的な「朝鮮的なもの」と普遍的な「西欧的なもの」はともすると相反するよう見えるが、すでに辛炯基^{シンヒョンギ}が、李孝石の郷土的色合いを持った作品とモダニズムの傾向の作品とが、いずれも「近代」指向的であるという点で相通じていると分析したように²、上で言及した2つの価値もやはり、どちらかが存在しようとするならばもう一方の「発見」がなされなければならないという相互性を帯びているという面で相通ずる。「緑の塔」は「朝鮮的なもの」の美しさのような美的感覚が後景へ退き、日本女性と朝鮮男性の恋愛が前景化し、語りの中心を占めるという特徴を持つ。内鮮結婚が同化政策の一貫として登場したのは1921年「内鮮人通婚法案」が総督府令99号として成立してからだが、この政策は、一時的には反応があったものの、朝鮮人の民族的反発、朝鮮人に対する日本人の差別的視線によって本格的に施行されていなかったところ、1938年の大陸兵站基地化政策に基づいた時局対策調査会の第1議題である「内鮮一体ノ強化徹底ニ関スル件」の発表以後、再び本格化している³。男性家長モデルを想定して作られた日本の戸籍制度において女性の男性依存度は非常に高く、1939年以後、国策として内鮮結婚が奨励された当時でも日本女性らは朝鮮男性との結婚をためらっており⁴、朝鮮男性が日本戸籍を得るための方便として日本女性と結婚する事例もあったほど⁵、内鮮結婚は結婚の当事者たちの生活に大きな変化をもたらした。

「緑の塔」の2人の男女の恋愛が成就する過程には様々な障害が登場するが、李光洙^{イグァンス}や韓雪野^{ハンソリヤ}の内鮮恋愛小説とは違い、2人の男女がそれぞれ「外地」と「内地」という、互いの戸籍が違うという点はあまり問題にされない。2人も互いの戸籍の違いを明らかに認知しているがそれほど神経を使わず、さらには周りの人々も2人の出身の違いが恋愛の障害だとは考えていない。小説の中で朝鮮という表象が重要なものとして扱われる場面は、2

1 李孝石の日本語小説に表れる「朝鮮的なもの」と「美的なもの」は作品ごとに風合いを異にするため、その複雑な層を詳しく分析する必要がある。今後別稿を通じてより詳細に論じることとする。

2 辛炯基「李孝石と植民地近代：分裂の記憶のために」『植民地近代の視座：朝鮮と日本』岩波書店、2004年、95～117頁参照。

3 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配』下巻、青木書店、1973年、49頁参照。

4 仲立ち業者が朝鮮人を日本人であると騙して結婚をさせたり、朝鮮人と暮らすのを嫌がったあまり、女性が子供を2人産んでからでも逃亡する事例もあり(鈴木裕子『従軍慰安婦・内鮮結婚：性の侵略・戦後責任を考える』未来社、1992年、107頁)、気乗りはしないが国策に従って朝鮮男性と結婚した日本女性に対して、日本政府がしっかりと管理をしないので内鮮結婚は「不公平」だと考える事例もあった(鈴木裕子前掲、107～108頁)。

5 労働目的で日本へ移住した朝鮮男性が日本人との不公平な賃金格差に不満を抱き、内地戸籍を獲得するため内鮮結婚という国策を利用して日本女性と結婚することもあったほど、皇国臣民化政策以後も戸籍による差別は続いていた(鈴木裕子前掲、110頁)。

人の恋愛と関連する問題ではなく、むしろ第三者の外貌を描くときである。「内地」と「外地」の分割にまったく神経を使わない李孝石から、総督府政治に協力も抵抗もせず、総督府の政策に包摂もされない「第3の道」を指向することで戦時体制を突破しようとする姿勢を読み取ることができるだろう。

「緑の塔」に登場する「外地人」と「内地人」の関係を描く李孝石の観点を考慮してみれば、彼の作品の素材が総督府の内鮮一体政策と表面上類似していても、総督府の政策を擁護しようという目的を持っていたとは判断しがたい側面が存在する。「緑の塔」が連載された『国民新報』は、毎日新報社が1939年4月3日、「半島の皇国臣民化」を目的に創刊した日本語週刊紙で、記事はもちろん掲載される小説も、皇国臣民化政策を素材としていた。「緑の塔」に登場する朝鮮人男性と日本人女性の間の恋は、明らかに総督府の内鮮結婚政策を意識して採られた素材だっただろう。しかし小説の素材が総督府の政策の一環だったからといって、小説の内容を十分に考慮せず、彼がその政策に全的に同意し、督励する目的があったと断定はしづらい。

1940年4月に雑誌『三千里』は、当時の有力日刊紙である『朝鮮日報』、『東亜日報』、『毎日新報』に小説を連載していた4名の小説家を対象に、「新聞小説と作家の態度」というタイトルでアンケートを実施している。当時『毎日新報』と『国民新報』で同時に長編小説を連載していた李孝石は、「戦争」を取り扱われるか」という『三千里』編集陣の質問に、「取り扱いません。作中人物の生活に、隠然中にその影響が浸潤するかもしれませんが、創作意識に上らせはしません⁶」と答え、自身の文学創作が戦時体制の政策に従属するものではないことを明らかにしている。当時の李孝石は朝鮮で発刊される総督府の2つの機関紙双方で長編小説を連載していたため、一方では当時の文壇の中で最も総督府の政策に協力的な文人と見られもする。しかし『三千里』のアンケートで、上のように戦争の状況と彼の作品世界をきっちり区別する回答を残したことは、非常に興味深い⁷。彼は総督府機関紙に小説を連載していようと、総督府の政策に迎合して彼の創作傾向をねじ曲げることはしないという意志を持っていたのである。

李孝石の「緑の塔」に関連のある先行研究は多数あるが、これらの先行研究はすべて、「緑の塔」が日本語で創作されたという事実にとそれほど注目していない⁸。だが、その当時の朝鮮の作家たちが、日本語創作を強要する時代的雰囲気にも強気に反発したことからも分かるように、どんな言語で文学を創作するかによって表現可能な範囲と方式に厳然たる違いが存在するため⁹、「美的感覚」というキーワードが李孝石文学の全てを貫いていると

6 「新聞小説과 作家의 態度」『삼천리』1940年3月、123頁。

7 1940年3月号の『三千里』には、「朝鮮半島」の望ましい内鮮一体を模索する朝鮮の有名な知識人たちの論説と（玄永燮、金明植、印貞植、金漢卿、金斗禎を筆者に掲げた特集「内鮮一體」體内の朝鮮民衆的諸問題の考察）、生活改善を強調する李光洙の論説と小説（「生活改善의 急務를 論함」、「옥수수」）、そして戦争が長期化するなかで主婦たちの生活改善の方向を模索する座談会（「戦争長期化「家庭生活」主婦座談會」）が載っている。以前とは異なり、明らかに国策を宣伝する意図を込めた文章を積極的に掲載する『三千里』の編集の方向の中でも、李孝石は自身の作品世界と戦時状況の間に距離を置いている。

8 김윤식『일제말기의 한국 작가의 일본어 글쓰기론』서울대학교 출판부, 2003年; 김형수「이효석, '비협력'과 '주저하는 협력' 사이의 문학」『인문학논총』第5集1号, 2005年; 김수영「'동화(同化) 이데올로기': 그 이상과 현실의 변주」『한민족문화연구』第22集, 2007年; 김재영「'구라과주의'의 형식으로서의 소설: 이효석 작품에 나타난 서양문화의 인유에 대하여」『현대문학의 연구』46号, 2011年; 김대성「이효석 문학의 초월적 미의식 고찰」『한국문학논총』第58集, 2011年; 김재용「일제말 이효석 문학과 우회적 저항」『한국근대문학연구』24集, 2011年; 윤대석「1930년대 '피[血]'의 담론과 일본어소설」『우리말 글』51集, 2011年; 정여울「이효석 텍스트의 공간적 표상과 미의식 연구」서울대학교 박사학위논문, 2012年; 이양숙「이효석의 「푸른 탑」에 나타난 내선결혼의 전략」『한국문학이론과 비평』55号, 2012年。

9 1938年10月、新協劇團の「春香伝」が京城で公演された当時、ちょうど満洲にいた林房雄が京城を訪問し、彼を中心に張赫宙、林和、金文輯、兪鎮午、李泰俊、柳致真、辛島驍、総督府警務局図書館長までが参席し、「朝鮮文学の将来」という話題で座談会が開催された。ここで朝鮮の文化を表現する手段として朝鮮語が持つ重要性が議論されただけに、当時の文人たちが文学創作における朝鮮語の重要性を相当に深く認識していたことが分かる。文学における朝鮮語使用についての問題は、在日朝鮮文人らにとっても重要なテーマだったため、張赫宙（「朝鮮の知識人達の民族心理」『文芸』1939年2月）と金史良（「朝鮮文学風月録」『文芸首都』1939年6月）もまた、

はいえ、創作言語がもたらす違いを無視することはできない¹⁰。また、言語によって対象読者が異なるという点もまた考慮しなければならない。特に、先に言及したとおり、李孝石の日本語創作作品には韓国語小説における以上に「朝鮮的なもの」に対する強調が目立つため、これに注目する必要がある。

本稿は、李孝石の日本語創作が、総督府が皇国臣民化政策の脈絡で行っていた内鮮一体政策の時代的雰囲気の中で創作されたという状況を考慮する中で、李孝石が日本語で小説を書くようになった経緯を考察した後、李孝石の日本語小説の中で「緑の塔」が持つ特徴を分析することにする。「朝鮮的なもの」と「世界的なもの」が共存する李孝石の日本語小説の性格究明は、美的なものを李孝石の小説世界全体を貫く概念として設定しようとする作業と、世界的なものを志向し皇国臣民化政策の下でも曲がりなりにも抵抗意識を見せたと解釈するこれまでの二分された研究傾向から脱皮し、李孝石の日本語小説が素材と形式の側面では総督府の政策と共存しつつも、全的に従属はしない奇異な様相を分析し、「緑の塔」を中心にそれが持つ意義を究明しようとするものである。抵抗と協力の二分法によっても、李孝石が時代の現実を無視したという視角によっても分析が難しい、李孝石小説の持つ独特な位相を究明する作業は、厳しい時代の現実の中でも独自の作家精神を失わず、作品を創作していかうとする朝鮮文人の精神的苦闘の一面を見せてくれることだろう。

2. 李孝石の日本語小説と「緑の塔」

李孝石の日本語小説は全部で7篇あり、そのうち6篇が短篇の分量で、「緑の塔」のみが4ヶ月あまりにわたって週刊紙に連載された中篇程度の分量である。「緑の塔」と「薊の章」が掲載された『国民新報』と『国民文学』を除外すれば、彼の日本語小説は全て日本で刊行された雑誌に掲載されており、これらの雑誌は日本で「外地」問題と朝鮮問題を扱う代表的な雑誌として認められていた。李孝石がそうした雑誌社から依頼を受けた当時はその雑誌の性格に合う作品を依頼されたであろうし、彼らの要求に合う文学を創作する以外になかっただろう。特に、朝鮮的なものの価値を再発見しようとする李孝石の日本語小説の素材は、以前の小説では1度も登場しておらず、そうしたものがはじめて登場した1939年以後に創作された小説でも、韓国語で創作した小説では「朝鮮的なもの」の美しさを論じていないため¹¹、日本語小説を創作する過程で新たに発見したものと思われる¹²。李孝石の日本語小説の「朝鮮的なもの」の起源は、「内地」で「内地」の日本とは違う「外地」、「朝鮮半島」文人の「朝鮮的な」文学作品を読みたがる日本人読者の要求に応じようとした、という目的もあるのだろう。

この座談会以後、それぞれ文学での朝鮮語使用に関する立場を表明する文章を発表している(渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮:文学的考察』岩波文庫、2006年、83～85頁参照)。

10 同じ情景を描写するとしても、日本語と韓国語の表現方式が違うため、2つの言語を通して感じられる感覚は異なるほかない。また母国語での創作と外国語での創作は、文章の流麗さや表現の適切さの側面で違いが出やすい。李孝石がいくら日本語に馴染みのある環境で育ったとはいえ、彼の母国語は韓国語であり、日本語は外国語であった。実際に彼は、日本式の音読みで書かれた店の看板の意味を正しく理解できず、店を探せなかったという状況を経験してもいた(「유도소식」『경성일보』1940年4月6日)。

11 例外的に、「碧空無限」の場合、韓国語で創作されたものの小説の中で韓服の美しさを論じる部分を見つけることができる。この小説が総督府機関紙である『毎日新報』に連載されたという事実を考慮してみるならば、当時の日本、あるいは総督府が志向していた、内地の一部としての外地・朝鮮が持つ特殊性を具現する目的があったものと見られる。小説の中で韓服という素材が持つ重要性は非常に低く、韓服に対する言及がなくとも語りの進行に何ら問題がないことを考慮するとき、韓服という表象が総督府の政策と密接な関連を持っていると理解しても差し支えないだろう。

12 李孝石の日本語小説は主に韓服を着た女性人物を利用し、「朝鮮的なもの」の持つ美しさを形象化したものが最も多く(「緑の塔」、「春衣裳」、「秋」、「薊の章」)、その他にも、朝鮮のかつての王朝時代の遺物である白磁あるいは長剣を利用し、朝鮮的なものの美しさを論じる作品がある(「ほのかな光」、「秋」)。例外的に、李孝石の日本語小説のうち、「銀の鱒」には「朝鮮的なもの」の表象が目立って現れていない。この小説が、李孝石が初めて創作した日本語小説であり、この小説以後に創作された日本語小説では全て「朝鮮的なもの」が形象化されているという点を考慮してみれば、この小説はあまり成功したものではなく、日本人読者に「朝鮮文学」としてアピールしようとするなら朝鮮だけの特殊な何かを見つけ出さなければならないと感じ、以後の小説では「朝鮮的なもの」を形象化することにしたのではないかと考える。より詳細な分析は今後、李孝石の日本語小説研究で補充することとする。

李孝石の小説世界において、「朝鮮的なもの」は非常にそぐわないものだ。彼の随筆では、彼が西欧的生活を楽しんでいた形跡をあちこちで見つけることができ¹³、西欧文学についての断想もまた頻りに登場し、彼の文学論において文学一般を指す言葉はいつも西欧文学であり、西欧文学をモデルとして朝鮮の文学を説明している。さらにこうした傾向は、彼の文学で「朝鮮的なもの」が描かれるようになった後の 1942 年、国民文学を論じるときにすら登場する¹⁴。また彼は、内鮮一体政策が本格的に施行されてから、朝鮮文人らが自分自身だけの文学世界を啓発するどころか、外地、すなわち海外の編集者らの視角に合う作品を創作するため、「郷土的なもの」、「地域的なもの」をあえて作り出す傾向を批判した¹⁵。

李孝石の上のような態度は、彼が日本語で小説を創作する前に発表された作品を考えてみれば実に自然である。1939 年 9 月、雑誌『女性』に掲載された「郷愁」で、彼は戦時体制という時代的狀況を言い訳に農地を荒廃させ、地域住民らの私有財産と生計手段を奪い取った総督府の政策を批判的に描いている¹⁶。李孝石は、大日本帝国の建設という、朝鮮人にとって何の実益ももたらすことのないわべだけの名分が、彼の好んで描いた朝鮮農村ののどかな風景を破壊するという状況に同意しがたかったことだろう。しかし 1940 年と 1941 年の間に発表された李孝石の作品は、それ以前とそれ以後の作品傾向と相当に違う面貌を見せる。この時期に李孝石は、国民文学論が提唱された 1942 年の時点においても批判していた「朝鮮的なもの」の創案に積極的に進む。1940 年と 1941 年の前後は、総督府の総力戦体制突入と、内地人の視線を内面化した「朝鮮的なもの」の創出に批判的だった彼が 2 年間集中的に「朝鮮的なもの」を形象化した理由としての、彼の「内地」文壇への進出という欲とが接触しあう時点なのだろう。

日本で李孝石の作品は、彼が「内地」文壇の雑誌に彼の名前で作品を発表する前から注目されていたものと見られる。彼が初めて「内地」の雑誌に日本語で作品を発表したのは 1940 年 2 月だが、同じ時期に申健^{シンゴン}の編集で教材社から刊行された『朝鮮小説代表作集』にも李孝石の小説「豚」が含まれていた。すぐ翌月の 1940 年 3 月に張赫宙^{チャンヒョクチュ}の編集で赤塚書房から刊行された『朝鮮文学選集』にも、李孝石の自訳で「蕎麦の花の頃」が載っている。李孝石の小説の中には、都市や異国的な素材を対象に創作した小説が相当数あるにもかかわらず、2 種類の朝鮮文学集に載った彼の小説が、いずれも都市ならぬ朝鮮の自然を背景としており、人間と動物との愛着を描いた作品であるということは、日本人が「朝鮮半島作家」李孝石の作品に見ようとする側面が何であるかを推測させる¹⁷。李孝石は京城帝国大学を卒業し、大学在学時代に日本語で詩を創作していたほどで、日本語でも文学作品を創作する能力があったため、日本文壇進出が夢物語というわけではなかっただろう。また「内地文壇」は彼の志向する西欧文壇からも、朝鮮文壇よりその価値を認められていただけに、「内地文壇」での彼の成功は、西欧文壇で認められることにより近付くことでもあった。問題は、彼の作品が日本文壇で興味を引くに足るような要素だが、それはほかならぬ内地とは区別される「朝鮮半島」だけが持つ「異国色」だった。

彼の文学に突如登場した「朝鮮的なもの」が日本文壇進出を念頭に置いたものであることは、日本での張赫宙との出会いを書いた随筆「春香伝来演の頃」からも読み取れる。彼はこの随筆で、張赫宙との出会いを楽しみ経験として記憶しつつ、彼の作品について「文章などどうでもいい、文字の琢磨^{マツマ}など左程大事なものではない、そ

13 김재영前掲, 314 頁参照。

14 이효석「문학과국민성: 한개의 문학적覺書」『매일신보』1942 年 3 月 3 日～6 日; 李孝石「私はかう考へてある」『国民文学』1942 年 4 月、43～46 頁。

15 이효석「문학과국민성: 한개의 문학적覺書(3)」『매일신보』1942 年 3 月 5 日参照。

16 이효석「향수」『여성』1939 年 9 月。

17 日本で刊行された 2 つの朝鮮文学集に関するより詳細な研究としては、박숙자「'朝鮮文學選集'과文學正典들」『한국어문교육연구회』39 集、2011 年を参照されたい。

の内容となる幅つたい人生や、大きな主題こそ、望ましく重大なものではあるまいか¹⁸」と言及している。張赫宙を眺める李孝石の視角は、張赫宙の作品を台本として村山知義の演出で上演された「春香伝」への高評価へと繋がる。当時の朝鮮の既成文人らの間では、日本の劇団である新協の「春香伝」の演出や脚色、そして朝鮮の文学作品を日本語で、また日本の劇様式へ当てはめることが不適切だったという評が支配的だった¹⁹。しかし李孝石は、他の文人たちが重点的に批判していた「春香伝」の演出が、この劇の持つ最大の長所だと高く評価する。他の朝鮮文人たちにとっては不自然だった「朝鮮的なもの」の「日本的再現」に李孝石が魅了された理由は、彼もまた、「春香伝」がそうだったように、朝鮮的なものを日本人に馴染むやり方で伝達する文学創作を準備していたためではないかと思う。1939年2月に「銀の鱒」を日本語で創作し、日本の雑誌に発表した彼の履歴を考慮してみると、「春香伝」を鑑賞した1938年10月は、彼が「銀の鱒」を準備していた時期である。彼にとって張赫宙の文学作品と「春香伝」の公演は、日本語作品の創作の方向に関する重要な参照点となりうるものだった。

「緑の塔」は李孝石の他の日本語小説とは異なり、「朝鮮的なもの」のみならず、李孝石が常に普遍的な理想として想定していた西欧の文学、その中でも英文学が重要な素材として登場する。「緑の塔」は皇国臣民化政策の広報を目的に創刊された『国民新報』に連載されただけに、やはり当時の総督府が注力していた内鮮一体政策のうちの1つである内鮮結婚を重要な素材としている。しかし小説の中での2人の男女の恋が実る過程を見てみると、朝鮮人と日本人という2人の互いに異なる戸籍は、英文学愛好家という同質性の前で大きく問題視されず、あたかも日鮮同祖論を連想させる朝鮮人と日本人の間の輸血場面でも、内鮮人の「血の同質性と結合」が強調される代わりに、2人が「血」という、肉体の接触よりも高い水準での合一を成し遂げたという側面が強調される。李孝石の日本語小説の中で最も総督府の政策に親和的であるべき「緑の塔」が、むしろ他の小説よりも総督府の政策と疎遠であるということは、非常に興味深い。その原因を分析するためには、「緑の塔」で「内鮮恋愛」や「日鮮同祖論」と類似する出来事がどのようなやり方で、総督府の政策とまったく関連のないものとして形象化されるかを分析する必要がある。

3. 平等な愛情関係の条件としての英文学

先に言及したとおり、李孝石の文学と随筆、そして評論で、英文学を含む西欧文学についての言及は容易く見つけることができる。文学のみならず西欧音楽にも造詣が深かった彼は、「緑の塔」と近い時期に〔朝鮮語で——訳註〕発表した「碧空無限」、「풀잎(草の葉)」でも、2人の男女の愛を結び合わせる媒介として、西欧の音楽と英文学を登場させる。李孝石の「緑の塔」に登場する英文学は、李孝石のそれまでの文学創作の傾向を考慮してみれば目新しいものではないが、皇国臣民化、内鮮一体を督励し、西欧列強と日本との間の緊張が高まっていた当時の状況についての論文が主に載っていた『国民新報』に、英文学を研究し楽しむ人々を登場させるという点は相当に異様である。また、この小説で英文学は、登場人物たちの関係を形成する核心として登場するため、その含意により注目する必要がある。

主人公・英民が研究する英文学の分野は、厳密に言えば英国の文学ではなくアイルランドの文学である²⁰。英

18 李孝石「春香伝来演の頃」『金融組合』朝鮮金融組合聯合會、1939年1月、『近代朝鮮文学日本語作品集』1908～1945 評論・随筆篇3、緑蔭書房、2002年、15頁。

19 当時の『批判』には、朝鮮の文人らが張赫宙原作、村山知義演出の「春香伝」を鑑賞した後、これを論じる座談会「新協“春香傳”座談會」が載っている。朝鮮文人らは「春香伝」について、演技力と技術上の優位は認めながら、朝鮮の生活方式を日本語で日本式に翻訳して演出する問題、演出者の作品理解の水準、歌舞伎的な技法の適切さをめぐって多くの批判を行った。新協の「春香伝」についての同時代的反応に関する研究としては、문경연「1930년대 말 〈신협(新協)〉의 『춘향전』 공연 관련 좌담회 연구」『우리어문연구』36集、우리어문학회、2010年を参照されたい。

20 アイルランド文学者としての英民は、京城帝国大学で英文学を専攻し、アイルランド文学者の1人であるシングを

民は「デアドラの伝説に就いて」という論文を書いているが、デアドラの伝説はアイルランドの古代の神話のうちでも最も多く紹介されており、アイルランド人の不屈の抵抗精神をよく表しているという理由で、アイルランド独立闘争が熾烈だった1880年代初めから独立を勝ち取った1922年の間に、多様な文学者らによって変容され、紹介された²¹。英民の書く論文の具体的な内容は紹介されていないが、彼が論文を書く最中に、イエイツとシングの作品を参照し続けていることから見て、彼の論文はイエイツとシングがデアドラ伝説を素材に創作した劇に関する研究である。イエイツの場合は、1907年に「Deirdre」というタイトルで、シングの場合は彼の死後、1910年に「Deirdre of the sorrows」というタイトルで、デアドラ伝説を脚色した戯曲がそれぞれ上演された。

アイルランド文学は、内鮮一体と皇国臣民化を志向する『国民新報』の趣旨に合わない素材である。崔載瑞は「緑の塔」が発表された2年後の1942年6月、『国民文学』に掲載した「朝鮮文学の現段階」という文章で、アイルランド文学はたとえ英語で創作されていても反英国的な側面が存在するため、朝鮮文学は反英国的ではない英国の一地方としての地域的特色を備えたスコットランド文学を目指すべきだと言及していた²²。シングを対象とした論文で京城帝国大学から学士学位を得た李孝石が、アイルランド文学、それもデアドラの伝説を扱った文学の持っている抵抗性を知らなかったはずはない。彼が、英民をシングとイエイツの劇を研究する研究者に設定した背景には、彼の文学を日本の国策への協調と分離しようとする意図があったのだろう。それにもかかわらず彼の小説は検閲にかからなかったのだが、それは、表面上は内鮮一体政策に符合する素材を扱い、イエイツとシングの戯曲、そしてデアドラの伝説が持つアイルランドの独立運動との関連性がまったく現れておらず、小説の中で総督府の政策に反対するという言及もまた現れなかったためだろう。

洋子を魅了させたアイルランド近代文学研究者・英民の姿は、2人の恋を内鮮一体とは違う脈絡から解釈しなければならないということの意味する。植民地支配に対する抵抗の意味を含んでいるアイルランド近代文学を媒介に結ばれる2人の愛は、内鮮一体の脈絡からはみ出している。この小説で、依然として普遍として、目指すべきモデルとして形象化された西欧文学である英文学の前で、英民と洋子は地域的脈絡を超越した個人として存在するのみである。英文学という普遍の前で、朝鮮や日本のような特殊性の指標はその意味を喪失し、ただ人間という普遍性の記号のみが残る。このように、「緑の塔」で李孝石は日帝の皇国臣民化政策を標榜するポーズだけを取り、実際にその内容は盛り込まないというやり方で、総督府の政策に対する自身の立場を翻さないまま総督府の政策を具現してみせる、矛盾するよう見えながら矛盾しないやり方を表現させている。

4. 愛情の完成としての輸血

李孝石は、小説での「肉体」の形象化を誰よりも重視した人でもある。彼は1938年7月31日から8月2日まで『朝鮮日報』に3回にわたって連載した「西歐精神과東方情趣: 肉體文學의傳統에 對하여(西歐精神と東方情趣: 肉体文学の伝統について)」で、小説内に描かれた肉体の重要性に言及したことがある。彼はギリシア文学の伝統から西欧文学思潮の変容に注目しながら、近代文学が興って以来あらわれた、肉体より精神を重視する自然主義の傾向も、結局肉体を重視する「デヒューマナイジング」運動に還元されたという歴史的事実を根拠に、小説において肉体が持つ重要性を再度想起させる。文学思潮において肉体性を重視する傾向を強調した彼のこの評論は、1938年3月6日に『朝鮮日報』に掲載した「健康한生命力の追求: 卑俗하게鑑賞함은讀者의 허물(健康な生命力の追求: 卑俗に鑑賞するは読者の虚物)」という文章と関連があるだろう。当時、李孝石の小

テーマに卒業論文を提出した李孝石の伝記的事実とも重なり合う。

21 이세순 「W. B. 예이츠의 운문극 『데어드라』: 로맨스에서 비극적 환희로」 『현대영미시연구』 第15卷 2号, 2000年, 135~136頁参照。

22 崔載瑞 「朝鮮文学の現段階」 『国民文学』 1942年6月。

説について、性的欲望に耽溺している、あまりに愛欲的であるなどといった他の文学者らの評価があった。彼は、自身の小説に形象化された愛欲を煽情的に解釈する評者らを批判しつつ、愛欲は人間の本然的な姿であり生命力を表す自然なものとして見る。彼は愛欲の場면을小説の中に挿入するのをためらう作家らに、創作をやめろとまで断言しながら、人間の多様な姿の形象化を本然とする文学において、愛欲は欠かすことのできない重要な要素であることを強調する。

「緑の塔」に登場する輸血場面もまた、普遍的なものとしての肉体性を重視する李孝石の文学観と相通する面がある。この小説では「内地」と「外地」の間の差別が直接に言及されず、むしろ内地と外地の間の格差が存在しないかのように描かれている。洋子の自殺騒動の前、英民が帝国大学の講師任用過程で困難を経験した理由は、「学部内のいろ／＼と微妙な空気²³」、「特殊事情²⁴」のような曖昧な表現で処理されており、英民の任用が噂によって挫折するや、牧が、実力本位で人事を決定すべきという原則が崩れたとして、英民のことを自身にも起こりうることと見做し、瀧川が花井と英民の戸籍とは関係なしに、2人とも洋子を苦しめた人間だとして冷遇すると、むしろ花井と英民の間には、それまでなかった絆が芽生える。

上で見たように、実際内地人と外地人という区別は小説の展開過程において決定的な要素として登場しない。「緑の塔」の輸血場面は、朝鮮民族と日本民族が互いに血を交換することのできるほどの、同じ血統であるという点を強調する内鮮一体政策と表面的には相通する点があるかもしれないが、先に言及した李孝石の肉体観と「緑の塔」で肉体的接触がもたらす人間関係の変化の側面を考慮すれば、これは他の出来事と同様に、内鮮一体と直接的に関連させてはならない。むしろ、皮膚と皮膚が触れるだけではない、身体を循環する血液と血液の結合という、輸血場面が見せるより内密な「肉体的」結合の側面に注目する必要がある。

「緑の塔」での肉体的魅力は、人と人との関係を変化させる重要な契機として登場する。英民は同じ学校の学生である崔哲から、閔子爵夫人が英民を彼女の娘・素姫の夫とする計画だという話を聞いたとき、「まるで、品物のよりどりぢやないか²⁵」と、見合い結婚に対して不快な感情を見せる。しかし彼に恋愛感情を抱いている素姫のおかげで、彼は素姫と頻繁に出会い、ついには少しずつ心が動きはじめる。彼が素姫に魅惑を感じる決定的な契機は、入浴を終えてシャワーガウンのみを着て出てきた素姫の姿を見た時だ。英民は人間の肉体の美しさを神秘を、魅惑的であり、これが人間にとって最も重要で絶対的なものと感じる。彼にとって肉体とは、自分自身を確証してくれる最も重要な部分でもあり、恋愛関係においても、性的魅力という側面を超え、相手の本質という側面で肉体を重視する。

英民はすでに素姫の肉体的に魅力に惑わされてしまっただけに、洋子と彼の恋が素姫から感じた魅力よりも高いレベルで成就されるには、単なる肉体と肉体の接触以上の、より次元の高い肉体的接触が必要である。「緑の塔」の輸血場面は、より内密な肉体的接触の一環として登場する。輸血は、互いの肉体的魅力と親密感を感じることを超えて、1人の生命を救うことである。輸血の過程で英民が、「自分のからだの生命力が、同じ量だけそつくり、洋子のからだに植ゑ込まれたのだ、と思ふと、ふしぎと元気²⁶」が湧くという経験をしたことは、彼が、輸血をした人の生命を助ける聖なる仕事であると同時に、2人が肉体的により緊密に繋がったという、次元の高い肉体的結合の快感を感じたことを意味する。輸血が成功した後、洋子が朝鮮での記憶を忘れて東京で再出発することを望んでいた瀧川もまた、洋子と英民の関係を認め、花井も英民が洋子の配偶者として適任だと認める。輸血は

23 李孝石「緑の塔」『国民新報』1940年1月21日(43号)、3回、『近代朝鮮文学日本語作品集』1908～1945 セレクション1、緑蔭書房、2008年、283頁。原文のルビは省略し、漢字は新字に改めた。

24 李孝石前掲、284頁。

25 李孝石前掲、273頁。

26 李孝石前掲、416頁。

2人のより次元の高い肉体的結合、そしてこれによる周囲の人々の承認と、互いが「運命」のように繋がっているということを確認する重要な契機である。

1919年の3・1運動以後、朝鮮人を日本人と同化させるという問題が先鋭な案件として登場してから²⁷、血統主義に基づいた戸籍制度の下で、朝鮮人を同じ祖先を持つ同族として編入するかどうかをめぐって紛糾した。日中戦争以後、皇国臣民化政策が本格化することで再び内鮮一体の問題は議論されはじめたが、李孝石は肉体的な親密感という、普遍的人間の価値の前で、内鮮一体が前提とする内地人と外地人との位階を突き崩してしまう。

(相川拓也訳)

27 今西一「帝国「日本」の自画像：1920年代の朝鮮「同化」論」『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999年参照。